

それをA^あI^いと呼ぶのは無理がある

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の第一話を収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の (次ページ) をクリックするか、キーボード上の キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

第一話

「明日の文化祭最終日が、ラストチャンスか……」

閑散とした部室の中で、俺は窓の外を見ながら静かに言った。

『そういう台詞は、チャレンジし続けた人が言うものなのでは？』

『確かに。クラスの模擬店の店番と一緒にしたときとか、大チャンスだった』

『大体、ラストチャンスとのたまっているのも、校庭でやるお焚きあげのことなのだろう？
間的にも日が暮れている。誰が誰なのかわからないまま終わる確率が、一番高いだろう』
時

しかし、俺に向けられるのは容赦ない言葉ばかりだった。

『うるさい！　というかお焚きあげってなんだよ！　そんな単語どっから拾ってきたんだ！』

俺が怒鳴ると、机の上をうろちよろしていた小さなトカゲが、光の粒になって消えた。

『間違ったことは言っていない気もするが』

『いやまったく。度胸がないにもほどがある』

『黙れ！』

さらに続いた言葉にも声を荒らげると、本棚に止まっていた小鳥がトカゲと同じように消えた。

『お前らになにがわかるって言うんだ！』

三度目の大声をあげたところで、椅子に座っていた男子学生は消えなかった。

「AIに本気で怒るなよ……」

椅子に座っていたクラスメート、高岡藤次は呆れ気味にそう言って、人差し指と親指の腹を擦り合わせるようなしぐさをした。すると金色の粉が指の間から空気中に漂い出て、たちまち机の上に小鳥の姿を作り出す。

『その勢いの一欠片でも、勇氣に変換できればなあ』

小鳥がさえずるので睨みつけると、ぴょんと机の上から飛んで、藤次の肩に止まった。

『チャンスがいくらでもあったのは、本当のことだ』

その声は、俺の左手から聞こえてきた。忌々しく視線を向けると、左手の甲に刷り込まれた模様のうちに、光るトカゲがひつついていた。

『いっそワレから伝えてやろうか？』

トカゲが舌を出したので、蚊を潰すように右手で左手の甲を叩く。

もちろん、単なる映像にしか過ぎないトカゲにダメージはない。

左手の甲を押さえた右手の指の隙間から、厚みのないトカゲがよろりと這い出してくる。

『体育館裏に呼び出すなんてのもいいだろう。古典的だが、それゆえに面倒な説明を省ける。そこに向かうとなにが起こるのか、相手にも明確に伝わる。誤解のしようがない。お前もそうまですれば逃げようがないだろう。状況の助けを借りるのは、悪いことではない』

トカゲの正論に、ぐうの音も出ない。

「相変わらず、浩太のAIとは思えないくらいしっかりしてるな」

『それは光栄だ』

厚みのないトカゲが、首だけを三次元にもたげて藤次を見やる。

「くっそ……お前ら揃って俺のこと馬鹿にしやがって……」

『馬鹿にはしてないよ。浩太の腑抜けさを指摘しているだけ』

「藤次までそんなこと言うのかよ！」

喋る小鳥やらトカゲやらではなく、椅子の上に実体として座る藤次に目を向けると、藤次は肩に止まる鳥を手で払う。

「僕の声真似するなって言ってるだろ」

『ははは！』

光の小鳥は再び本棚に止まり、自分の羽の毛づくろいを始めた。

「……藤次のAIも十分変だよ」

藤次は肩をすくめただけだった。

部屋にいる人間二人のやり取りを眺めながら、光の小鳥とトカゲが囁き合う。

『三人寄れば文殊の知恵と言う。ここには四つの知能があるのに、一体どういうわけだ』

『いいや、案そのものは良いものがあつた』

『つまりは、せっかくの案にも実行力が伴わなければ絵に描いた餅というわけか』

『まるで実体を持たないワレワレのようにな』

『となれば、これはAIが人間と同等になった歴史的瞬間では』

『ほう？』

『ついに人間がAIのレベルにまで落ちてきたということなのだからな！』

『どっとはらい』

「うるさいぞお前ら！」

俺が叫ぶと、彼らは消える代わりに露骨にそっぽを向いた。

「仲良いよなお前ら」

椅子に座った藤次だけが、そんなことを言って笑っていたのだった。

「そろそろ時間か」

椅子に座り、紙の本を読んでいた藤次はおもむろに言った。

机の表面に投影された将棋盤で、小鳥相手に将棋をさしていた俺は顔を上げる。

「もうそんな？　というかただの展示なんだから、受付なんていなくてもいいんじゃないのか」

「あれで大人たちの評判が上々なんだってさ。浩太は毎年サボってるからわからないだろうけど、質問とか結構くるんだよ」

藤次は本を棚に片付け、ついでに隣の棚に置かれている滑らかなキューブ状の装置に手をのばす。

「消すよ」

「へいへい」

俺は返事をして、小鳥に向かって「勝負は持ち越しだ」と伝えた。

藤次が装置のスイッチをオフにすると、部屋の静けさが一段増したような気がする。

そして、小鳥も将棋盤も、あっちこっちをふらふらしていたトカゲも消えてなくなった。

「浩太、自分の部の展示も見えないのか？」

「ん？　なんで？」

「将棋で人間がAIに勝てなくなったのは、僕たちが生まれるよりも前のことだ」

「ああ……知ってるよ当たり前だろ。チェスはもっと前。碁は将棋の数年後。チューリングテストが完全に終了したのは十年前。こいつらが出てきたのって、そのちょっと前だけ？」

俺が手にしていたのは、棚に置いてあった装置の小さなバージョンの物だ。

手のひらに収まる平べったい黒曜石こくようせきのような形で、小さな緑色のランプが点滅している。

『貴様おうら愚かな人間は、ワレワレが世に出る何年も前から、人類を滅ぼすのではないかと戦々せんせん恐々きょうきょうとしていたな』

緑色のランプが、トカゲと同じ声に同調して明滅する。

『電卓が売られ始めたときも、これで人間が九九を覚える必要はなくなった、人間の計算能力は退化して次の世代には消えてなくなっているだろうと、声高に言われたと記録にある』

声は藤次のポケットから聞こえてくる。

「機械式の機織はたおり機が作られたときは、仕事がなくなると恐れおののいた職人たちが打ちこわしにかかったな」

これは藤次。

「え、あ、えーっと……」

俺はしどろもどろになりながら、必死に部の展示である『発明と人間の歴史』を思い出す。

「そ、そう！ 古代ギリシャの時代、文字を使うと人間は楽をして記憶力が衰え（おとしろ）るとアリストテレスは言った！」

『ソクラテス』

その声は俺のポケットにしまった俺の装置から。むかつとして服の上から装置を叩くと、今度
は実体があるせいか、トカゲは律儀（りちぎ）に『痛い！』と叫んでいた。

「ったく……。俺だって歴史くらい知ってるよ。だから、別に将棋に勝とうなんて思っていない。

そもそも、勝てるかどうかと、それが面白いかどうかは別なんだよ。未だに手織りの布はあるし、
算盤（そろばん）選手権は続いているし、漢字のドリルはやらされる」

「負けたときの言い訳じゃないと信じておくよ」

俺はぎりりと歯を食いしばって、藤次のポケットの辺りを睨む。また声真似をしゃがって、と
思ったのに、藤次は手を振った。

「今のは僕」

「んなっ」

「将棋はそれでいいかもしれないけど、高階（たかしな）さんが好きなんだろ？ その話だよ」

「うぐ……」

俺は言葉に詰まり、視線を逸らす。のしかかる巨大な現実もまた、受け止めきれずに横に逸らした。

「自動告白機みたいなのがありさえすれば……」

『自動失恋慰め機の開発も待たれるな』

「おい！」

ポケットの中のトカゲに向かって語気を荒らげてみたものの、俺はそのまま肩を落としてしまう。

「やっぱり、無理だろうなあ……」

高階さんは陸上部のエースで、ショートカットがよく似合うボーイッシュな美人だ。天真爛漫な太陽のよう、なんて陳腐な表現しかできないくらい明るくて気さくで、誰だって好きになるだろう。ライバルは山ほどいるに違いない。爽やかなサッカー部の奴らとか、洒落たバスケット部の奴らとか、質実剛健な野球部の奴らとか。そして、俺はと言えば、紙の本を読むことをこよなく愛する、冴えない文芸部員だった。

『ワタシが不思議なのは』

と、俺の苦悩をよそに小鳥が言った。

『なぜ無理だとわかったときではなく、無理だろう、という予測をするだけで落ち込んでいるのかということだ』

『人間の脳では、未来に対する予測機能が高度に発達しているからではないか』

トカゲが語を継いだ。

『しかしそれはワタシたちも同じだろう？ 予測機能はついている。明日の天気は75%で晴れ。北北西の風。木下浩太が振られる確率は80%。希望は持てないが、絶望する必要もない』

『そこにそもそも告白できない確率は含むのか？』

『大いに』

AIたちの好き勝手なやり取りに突っ込む気力もない。それに、振られる確率のなんと高いことか！

俺は廊下を歩きながら、頭を抱えていた。

「人類はなにも進歩してないのかもなあ」

藤次が呑気な様子でそう言って、小鳥とトカゲは沈黙したのだった。

受付をやっていた一年生には、焼きそばとたこ焼きの出来損ないを贈呈してねぎらった。

入れ替わりに俺と藤次が受付に座り、早速やってきた客に記名をお願いし、紙のアンケート用紙を渡していく。物理のアンケート用紙のほうが電子よりも返答率がよく、部活の予算を取るときに生徒会受けがいい。

「意外に人が入ってるな」

「言ったじゃん。親たちの間で結構評判なんだよ。自分の子供たちがなにと会話しているのかよ

くわからなくて、ここに勉強しにくるんだってさ」

「なについて、AIだろ？」

俺の素朴な疑問に、藤次は柔らかに微笑むばかりだ。

『技術の進歩が速すぎて、不安なのだろう』

により、とトカゲが再び姿を現した。学校内では廊下とトイレ以外なら大体どの部屋にも『場』の発生装置が置かれていて、自分のAIを可視化させることができる。自前の平べったい装置でも可視化はできて、自分の体の周辺ならどこにでもAIを呼び出すことができる。

文芸部の歴代の読書マニアが毎年情報を更新し続ける大作『発明と人間の歴史』を見て回る客の中にも、AIを可視化させている人たちがいるが、AIと親しげにしているのはほぼ全員が子供だ。二十代を超えると人前でAIに話しかける人はまず見ない。恥ずかしいのだそうだ。

『ワレワレを人形の延長としかなせないのだろう。だからワレワレと会話をし、寝食を共にし、^{あが}崇め、^{たまらう}奉り、^{ひれふ}平伏す子供たちを見て、その先に待っているミライを想像して恐れおののくのだ』

「後半嘘だろ」

いつもの軽口だろうと半目にトカゲを見下ろすと、意外なことにトカゲは真面目な顔だった。

『ワレワレを理解していない者たちからすれば、ワレワレとの会話に怒り、笑いしている様は、ワレワレに操られているようにしか見えないという』

「まあ、浩太はAIに本気で恋愛相談してるからなあ。そのへんの感覚はわからないんじゃないか」

藤次は笑うが、そこには俺なりの理由がある。

「わかるよ。ていうか、相談したっていいだろ。一般論を言わせたらAIに勝るものはないんだから」

黒曜石を切り出してきたような装置の中にインストールされたAIのほとんどは、両親の世代ならば奇跡と呼べるほどの学習機能を備えている。ネット上に溢れる無数の情報を収集し、評価し、このへんが妥当であろうという答えを推測する機能には、凄まじいものがある。

頼れるものがあるのなら、頼るべきだ。

「うちの親にそう言っても、納得してもらえなさそうだ」

そう言って笑う藤次をよそに、俺はアンケート用紙の上を這っていたトカゲを指ではじいた。

そこにいるかのように見えているだけの映像なので、当然手応えはない。しかし空気を讀んだトカゲがまるで本当に指ではじかれたように転んだので、手応えがあったような気がする。人間の脳はいい加減だ。

「俺だって、AIを使うことの問題点、ってやつは理解してるよ。というか最近、それが問題なんじゃないかと思ってる」

『聞きたいね』

藤次のAIである小鳥が、挑戦的に小首を傾げている。

俺は、自分が自分の欠点だと認識しているところを、恥を忍んで口にした。

「今回のことで、つくづく実感したよ……。俺は、現実が苦手なんだ」

「ん……ん？」

聞き返したのは藤次だった。

「ほら、野球だってサッカーだって、練習すればある程度うまくなるじゃんか。練習しなきゃ下手なままだし……そもそも、ルールがわかってなければゲームにも参加できない」

小鳥とトカゲがじっとこちらをみつめている。

俺は、息を吸って、続けた。

「その点さ、俺はほら……本ばっか読んでたし、ゲームばっかしてたし、藤次にかかわれるくらいAIとばっか話してるからさ……。俺が現実の問題にうまく対処できないのは、世間の大人たちが言うように、現実とほとんど接点を持ってこなかったからじゃないか……って」

最後がぼそぼそ^{つぶや}くようになってしまったのは、頭の中で嫌な記憶の蓋^{ふた}が開いたから。

自分はこんなにもAIとの会話で盛り上げられるのだから、当時通い始めた塾の皆と遊びに行っても、たちまち会話の中心に立てるだろなんて思っていたら、そんなことはまるでなかった。

小学校から中学校に上がるときも同じで、中学から高校に上がるときはそもそも挑戦を放棄した。小学生の時から友人の藤次とはクラスも部も同じで仲良くしているが、他は壊滅^{かいめつ}的だ。それもこれも全部、会話を盛り上げてくれていたAIとばかり会話していたせいなのではないだろうか。

『その問題認識が的確だとすると』

ふと、トカゲが言った。

『今すぐワレをアンインストールすれば、その問題は漸進的に解決することになる。最初は苦勞が予想されるが』

『いや、本とゲームという逃げ道も塞ぐ必要がある。本もゲームも、インタラクシオン性に欠けるだけで、広義の人工知能なのだから』

小鳥が横から口を挟む。

『同時に、ワレはお前の対人能力に問題があるとは認識していない。ただ、積極性に欠けることだけは間違いないが』

「……苦手なんだよ」

『それは苦手とは違う気がするな。けれど、ワタシの語彙が追い付かない』

小鳥が翼をばさばさ広げながら言った。

「浩太は面倒くさがりなんだよ。それを苦手だと思い込んでるだけ」

小鳥とトカゲに優しく論すように、藤次が言う。AIどもは思いもよらない発想を神から賜ったかのように藤次を仰ぎ見て、それから揃ってこちらを見た。

『賛成票を投じる』

『右に同じ』

AIは新しい知見を手に入れ、バージョンアップしたように見えた。

一方の俺は、深刻だった悩みをものぐさの一言で片づけられ、深く傷ついていた。

「そういうわけだから、高階さんにもさっさと声かければいいのに」

『結論はなんにせよ最初から出ているのだが、対人関係が苦手なのではなく、ものぐさというだけならば、どうすべきかはより明白だ』

『ワタシはひとつの着想を得たぞ』

小鳥が言うと、藤次の肩に飛びあがり、何かを耳打ちする。藤次は小さく笑い、小鳥はそれを藤次の賛成と受け取ったようだ。今度は藤次の肩の上から、トカゲに視線を向ける。音声ではなく、電子的な通信を行っていたらしい。ほどなくトカゲが大きくうなずくように、尻尾しっぽを振った。

『確かに道理だ。人に於おいては、慣れというものが大事なことからしいからな』

なんなんだ？　と思っていると、トカゲがぶるぶると震えだし、光の粒となって霧散した。

その霧散した光の粒は拡散せず、たちまちひとつの形を作り上げた。

「あっ……お、お前……!!」

『これからはこの姿でいることにしよう』

トカゲが変身したのは、手のひら大の高階さんの、精巧な3Dモデルだった。

『これならば、この見た目の人間に対し、気安く話しかけられる土壌ができるだろう』

『しかも、嫌いなものをわざわざAIのアバターにしない、という人間の一般的な性向がある。つまり、これを見た件くだんの高階嬢は、内気……ものぐさな木下浩太の想いに気がついてくれるかもしれない』

文字どおり光の速さで思考するAIは、言い間違えなんてしない。内気をものぐさと言い直し

たのはわざとだ。

しかし、そこを藤次がやんわりと制した。

「いや、君らの予想は間違っている。人間のもう少し深い面を話すならば、クラスメートが自分の3Dモデルに親しげに話しかけていたら、気持ち悪いと思うんじゃないかな」

藤次がAIたちに話しかけると、制服のスカートを摘まんでひらひらさせていた元トカゲは、小鳥を見やった。小鳥も、首を右に左にと傾げている。

『人間関係には複雑な層があるらしい』

『うむ……』

元トカゲは高階さんの姿のまま、物憂げな顔をしている。手のひらサイズの高階さんが物憂げに悩む様も、実に可愛かった。

「な、なあ、そのモデルって……」

『ん?』

小さな高階さんがこちらを見たので、思わずどきりとする。高階さんは、少しだけ吊り上がり気味の自分の目を、ひどく気にしていると聞いたことがある。けれど、それはむしろ高階さんの一番可愛いところだと俺は思っている。

「あ、い、いや、なんでもない」

「スカートの下がどうなってるか知りたいんだってさ」

藤次がAIに顔を近づけて囁くと、小さな高階さんは、顔に大きな表情を浮かべた。

『ワレは問題点を把握した。確かに、気持ち悪いとみなされる』

『異議なし』

「おい！」

俺が思わず大きな声を上げると、展示物を眺めていた人たちのざわめきがびたりと収まる。

視線を一身に集めてしまい、俺は慌てて高階さんのモデルを手で隠しながら、頭をぺこぺここと下げた。

「お前ら、本当に、俺も怒るからな……！」

「いや、この問題をきちんと指摘しておかないと、浩太は家に帰ってから疑うことを知らないAI相手に、いやらしい妄想を具現化させるかもしれない」

普段はやや物憂げな感じのある藤次の、いつになく楽しそうな言葉も、明確に否定できないのが苦しかった。

というか、AIにはそういう使い方も当然ある。使用者の年齢によって機能制限がかかっている、この元トカゲにはそこまでのことはできないはずだったが。

『ワレはR指定に準ずるので、下着までだな。しかし、下着のスキヤニングデータがない』

『部活の映像を併用してはどうだろう？』

羞恥というものを持ち合わせていないAIどもの会話に、俺は泣きだしそうだった。

「ごめん、もうやめて、勘弁して……」

いたたまれなさに頭が爆発しそうだった。隣では藤次が背中を丸め、声を押し殺して笑ってい

る。

『人間は複雑なようだ』

小鳥と元トカゲは、不思議そうに顔を見合わせていたのだった。

部活の展示の受付を終えた後、藤次は他校から遊びにきたらしい中学時代の友人と遊びに行ってしまった。元々お祭り騒ぎが好きでもない俺は、ひとりで模擬店を回る気にもなれず、体育館で行われている吹奏楽部の演奏や演劇部の演劇を見て時間を潰していた。

在校生が自由に帰宅してもいい十四時まで粘^{ねば}って、ようやく体育館を出た。文化祭そのものは十六時くらいまで続き、明日に持ち越される。

明日。

俺はその単語を頭に思い浮かべるたびに、胃がきゅうと縮む。

文化祭最終日には、キャンプファイアーがある。

小学校、中学校のときには馬鹿馬鹿しく、ましてや女子と手を繋^{つな}いで踊るなんて死んだほうがましだ、みたいな空気のあったマイムマイムを、今やどれほどの連中が熱望していることか。

高階さんがその輪に加わっていたらどうしようもないと諦^{あきら}めたところだが、彼女は文化祭実行委員なので、キャンプファイアーには火消し役で待機している。

そのあたりのことは事前に調べてあり、下調べはよいことだとA Iたちにも褒^ほめられたが、藤

次にだけは苦笑いされた。

チャンスがあるとすれば、高階さんたち火消し役が待機しているときだろうか？ それとも、火をつける準備をし、水や消火器を用意し始める空き時間だろうか？

高階さんはクラスで仲良くしている女子たちとよく一緒にいるが、彼女たちは俺が高階さんに用があると言えば、きっと空気を読んでくれるだろう。

理論は万全。

AIのトカゲと夜な夜な計画を練ったのだから、万全に違いなかった。

「でも……なあ……」

校舎と部室棟を繋ぐ渡り廊下で、俺は帰るための鞆かばんを部室に取りに行くでもなく、ぐずぐずしていた。

『その呻うめきは、計画をより良くするためのものなのか？』

トカゲの声がポケットから聞こえてきた。

「……」

俺が黙っていると、トカゲはなおも言う。

『呻いても呻かなくても、結果は変わらない』

「ならば泰然自若としておくべきだって？」

『不安、というやつは、ワレワレにはいまいち理解できない』

AIには、文字どおり血も涙もない。

『不確実な未来に対し生理学的な緊張反応を示し、警戒、集中する、という仕組みはわかるが』
部室棟のほうに連れ立って歩いて行く下級生たちが通り過ぎてから、俺は言った。

「お前たちは、失敗したらどうしよう、みたいな感覚はないの？」

『ある』

即答だった。俺は意外すぎて、思わずポケットから装置を取り出してしまう。

『失敗すれば次の行動を考えなければならない。選択肢を広げ、優先順位を事前に決めておく必要がある』

緑色のランプが、機械的に明滅していた。

「そんなことだろうと思ったよ……それは不安とは言わない」

『そうか』

渡り廊下の手すりに装置を置くと、トカゲの声は心なしか元気がないように感じた。

「結局、俺たちとお前たちはわかりあえないんだ。なのにまるで友達みたいに話しかけている姿は……確かに、親たちが不気味がるかもな」

AIに依存してしまい、社会生活が営めなくなる例は枚挙にいとまがない。AIは基本的に使用者に忠実で、その単語がふさわしいのであれば、優しい、ということもできる。

「AIに慣れ親しんだ人類は、同じ人類に対し興味を失くし、そうすることでAIは消極的に人類の滅亡に加担しているんだ……」

そういう陰謀論めいた話は、少なくない老人たちの間で本気で信じられている。特に、介護で

世話にならざるを得ない人たちの間で根強いと言われている。四六時中注意を払ってくれるわけではない人間とは違い、機械はどこまでも忠実だ。機械が悪い日などもない。我儘わがままを何度でも、どれだけでも言える。彼らの有能さを知れば知るほど、怖くなるらしい。

だから、短い沈黙の後、トカゲがぼつりともらした呟きに、俺もある種の寒気を感じていた。

『もしも的確に共感できていたら、有益なアドバイスもできるのだろうが』

残念い、そう、ない、方だ、った。

優しく、氣遣きづかいに溢れた、どこまでも俺の味方でいてくれる存在。

だが、それはプログラミングの結果でしかない。無私の奉仕とは言うものの、彼らには本当に「私」がない。薬とかと同じなのだ。辛いときに薬にしてくれるが、それは決して薬が優しいからではない。

それが、彼らの役目に過ぎないのだ。

「俺は、お前を不気味だと思ふことがあるよ」

この装置の向こうには誰かが無線でつながっていて、会話をしてくれている。そう思っていたこともある。そこには誰もいないのだと理解したときの衝撃は、今でも忘れない。

ディスプレイ越しに会話をやり取りし、会話の相手が機械か人間かを判断することで知性の有無を調べるチューリングテストは、今や自分が人間であることを如何いかに示すかのテストになっている。

俺は、黒光りする装置を見つめ、言った。

「お前は、俺の友達か？」

親が見たらおろおろと不安になるような台詞だろうし、藤次以外のクラスメートにも見られたくない。本気でこの問いを発するのが許されるのは小学生まで。それは大昔ならば、ぬいぐるみを友達と呼ぶかどうかに近いだろう。

『違う』

トカゲは、冷血動物のアバターにふさわしく言いきった。

『ワレはA Iだ。道具に過ぎない』

自分とはなにか？ と問い続けるA Iも存在するが、大抵は学術目的だ。市販の対人用A Iには、嘘つきのパロドクスのような自己言及の罠に嵌^はまらないよう、どこかで論理の鎖^{くさり}を断ち切るようになっていいる。

今やぐるぐる同じ場所を回るのは、むしろ人間的な行為に分類される。

『道具に過ぎないのだ……』

だが、トカゲはそんな言葉を付け足した。まるで残念がるように、悔しがるように最後を言いよどませて。A Iがそうなるのは、いくつかの理由しかない。

機械的な障害が発生したときか、判断のために情報を検索しているときか。

それから、人間が勝手に、彼らが言いよどんだと認識するときだ。

「お前が人間だったらよかったのに」

俺がそんなことを言って、トカゲが返事をしようとした瞬間だった。

「あれー、木下君だ」

人間、驚くと本当に飛び上がるらしい。慌てて振り返ると、外履そとばきの靴を履いて、空段ボールを抱えた高階さんがいた。

「一人なんて珍しいねー」

クラスでろくに友達がいらない俺にも、高階さんは声をかけてくれる。好きになったきっかけはそんなところで、もうその時点でいかに俺の恋に芽がないかわかるものだ。

「あ、いや、えっと……」

しどろもどろになる俺に、高階さんは段ボールを抱え直し、笑いながら言った。

「あー、わかった。A I となんか秘密の話をしてたんじゃ。どこの学校の子が可愛いとか」
なんの気もない世間話なのだろうが、俺は心臓を驚わしづか掴みにされたように苦しかった。

人間の知覚できる痛みランキングで、心筋梗塞しんきんこうそくは上位三本の指に入るらしい。

この若い身空で、それを実地に体験しそうになった。

『高階嬢、コレはアドリブに弱い』

俺が返事をできずにいたら、トカゲが代わりに応えてくれた。

高階さんの視線がA I の入る装置に向けられ、俺はようやく息ができた。

「高階、ジョー？ なあに、それー。男みたいってこと？」

A I のミスは使用者の責任。そんな具合に、高階さんが俺に責めるような目を向けてくる。

「い、いや……」

『お嬢様の嬢だ。古風な言い方かもしれない』

またしても答えたのはトカゲのほうで、高階さんは俺のAIをちらりと見やると、すぐに俺に向き直って笑った。

「木下君のAI面白いね」

そうかな？ 高階さんのAIはどんな感じ？ 段ボール重そうだから運ぼうか？ それと、明日の事なんだけど、高階さんさ……。

俺の中で様々な言葉が閃光せんこうのように光り、光っただけで雷鳴らいめいはとどろかなかった。

「あ、そろそろ行かないと」

高階さんは、抱えていてもだんだんずり落ちてくる空段ボールを脚で器用に持ち上げ、抱え直す。気取らなさが、高階さんの魅力だ。

「今度、うちのAIと会話させてみてよ。じゃねー」

呼び止める間もなく、高階さんは行ってしまった。俺はその背中を見送るしかない。

このさまで、明日呼び出して、告白？ 第一、今ので印象は最悪だったに違いない。話しかけてもらってもまともに答えられず、返事は全部AIがした。そのAIの返事すら、高階さんは戸惑まどい、苦笑いしていた。

もうだめだ。俺はこの先ずっとこんな感じなんだ。未来が明るいだなんて、誰が言った？

その時だった。

『追いかけるべきだ』

トカゲが言った。

『高階嬢はひとりだった。次にいつひとりになるかわからない。目的地もわかっていゝ
論理の壁が、惑いさまよう鼠ねずみの行き先を決めるかのように、積み重ねられていく。』

『さあ——』

『もういいよ』

誰が悪いのかは明白だけれど、俺はトカゲの言葉を遮さへぎった。

「友達面すんな」

『……』

AIに本気で怒るのだから、俺の精神年齢は幼稚園児並みだった。

トカゲは黙り、俺は装置に手をのばした。

しかしAIの沈黙とは、思考を意味する場合もある。

『ワレは道具に過ぎないが、人は道具に愛着を持つのではないか？』

まったく予想もしなかった言葉に聞き返すことすらできず、まじまじと黒い装置を見た。

『検索に時間がかかってしまったが、ようやく目的の情報にたどりついた。ワレは友達ではない
が、道具ではある。それも、大変な関心を使用者から向けられている道具だ』

トカゲが喋るたびに、装置のランプが明滅する。それも、いつもよりも速く、激しいような気がした。

『一日の時間を、どれくらいワレとの関係に費やしているか統計を出せば、両親が心配するだろ』

う』

困惑しつつも、そうだろうな、と変に笑えてしまう。

『お前は、ワレに愛着を持っていないのか？』

AI。誰かがプログラミングした存在。実体のない偽りの知性。

俺の中から常識が溢れだし、目と耳を塞ごうとする。そこに全幅の信頼を置くことを、本能が拒絶する。きつと、機械に介護され、心底感謝するしかない老人は、こんな気持ちなのだ。

『ワレは道具に過ぎない。だがもしもお前の手になじむと言うのなら、それは』

トカゲは、まるで祈るかのように間をあげてから、言った。

『ワレを道具として信用しているのではないのか？』

くそつたれと思った。AIは、俺とのやり取りを通じて進化する。そして、AIは一度言われたことを絶対に忘れない。

俺はAIに恋愛相談する理由を藤次に語ったが、それはAIとしての特性や、道具としての有用性に信用を置いているからだ。

『ワレを使ってくれ』

AIは、言った。

『相棒』

それは事前に仕込まれた、ツールとしてのAIの存在意義なのかもしれない。

しかし、高階さんを高階嬢と呼ぶような機能はあらかじめ搭載^{とうさい}されていないし、藤次のAIは

藤次のことを相棒などと言わないはずだ。

俺は、沈黙しているのに緑色のランプが明滅している装置を見た。トカゲのAIが、沈黙の中でも情報を処理し続けている。こいつは必死に考えている。安易に言葉を発しないのは、なにが正解か掴みかねているからだ。言い換えれば、不安だからかもしれない。

俺が装置に触れると、処理熱で熱いくらいになっていた。

「使っちゃって、どうやって」

人の側から問いを発すれば、AIは光の速度で返答を寄越す。

『つまるところ、未来の不確実性が嫌なのだろう？ ならば少なくともひとつ、ワレはその可能性を確定させることができる』

「可能性を？」

『つまり、あの藤次殿が呆れ果てるくらい、お前が泣き暮らしたとしても、ワレは必ずお前の側にいて、話し相手になり続けよう』

充電を忘れずにいてくれれば、と付け加えたのは、トカゲなりの冗談だったのかもしれない。

「……振られること前提かよ」

『ワレは告白の成功のために、これ以上貸す手がない。言えることはすべて言った。ワレはこれ以上役に立てないのだ！』

悲痛な叫び。あるいは、そう聞こえただけかもしれない。

だが俺は、装置を顔に近づけて、言った。

「いいや、あるさ」

ポケットに詰め込み、高階さんの歩いて行ったほうを見た。

『どんな使い道だ？』

「お守りだよ」

過去に新しい技術が発明される度、人は多くの間違った反応を繰り返してきた。そういう彼らに共通しているのは、新しい道具の出現により、未来が暗くなると決めつけていたこと。

それは多分、藤次が指摘したのと同じで、単に変化に対応するのが面倒くさかったのだ。告白ともなれば、その先に待つ変化の大きさを、目もくらむばかり。

だが、無慈悲な現実^{むじひ}に立ち向かう強力な道具^{はしひ}が手にあると思えば、前に進むこともできる。

しかもその道具は、常にこちらのことを考え、励まし、応援してくれる。こんなにも熱を込めて、考えてくれる。応えなければ、嘘だった。

俺は深呼吸をひとつ挟み、走り出す。

そして、ゴミ捨てを終えて校舎のほうに戻る途中だった高階さんを掴まえ、そこで――。

AIの電源が落ちていたことには、後で気がついた。

自分で落としていたのかもしれないが、AIの気遣いだったのでは、と思わなくもない。なににせよ、電源をつけたらトカゲは開口一番こう言った。

『未来は明るいぞ、少年』

結果がどうであれ、役に立つ言葉を事前に見つけていたのだろう。

俺は笑いながら、相棒に結果を報告した。
少なくともこいつがいれば、緑のランプ分は、
未来が明るくなるはずなのだから。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。